

76 グレー＝シュル＝ロワンの黒田清輝通り（2021年8月26日）

「日本近代洋画の父」とされる黒田清輝(1866-1924)は、1890年7月から1892年12月までの約2年半、日本人として初めてグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。この小さな村には、黒田清輝通り (Rue KURODA Seiki) があります。パリから南東に約80キロの距離にあるグレー＝シュル＝ロワンには、セーヌ川の支流であるロワン川が流れ、穏やかな光が注がれる美しい風景が広がっていたことから、アメリカ、イギリスや北欧出身の芸術家が滞在していました。黒田はここで、他国の画家たちとの交流しながら、光を活かした絵画を学びました。



KURODA Seiki
(National Diet Library, Japan)
黒田清輝 (国立国会図書館)

黒田は、芸術家が出入りしていたオテル・シュヴィヨン (Hôtel Chevillon) に滞在し、1891年に初めてサロンに入選した《読書》を描きました。この絵のモデルは、この村に住んでいたマリア・ビヨー (Maria BILLAUT) という女性です。二人は恋仲にあったと言われています。オテル・シュヴィヨンは、1988年からはスウェーデンの文化財団 (グレー＝シュル＝ロワン財団) が所有し、アーティスト・レジデンスとして運営されています。



Lecture, 1891, musée National de Tokyo
《読書》1891年 東京国立博物館蔵
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

黒田の後、1920年代までの間に、浅井忠、久米桂一郎、和田英作、児島虎次郎、安井曾太郎を始めとする何人もの画家がグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。これらの画家たちは、洋画の発展に貢献しました。グレー＝シュル＝ロワンは、黒田にとって「心のふるさと」であり、「洋画家の聖地」と呼ばれるほど多くの日本の画家たちに愛された村でした。

2000年にグレーで活動した画家の作品約150点を集めた「グレー村の画家たち」展が日本で開催されました。これがきっかけとなり、2001年10月7日、グレー＝シュル＝ロワンにフランスで初めて日本人の名を冠した「黒田清輝通り」が誕生しました。フランスの地図に記載された日本人の名前は、19世紀末以降の日仏文化交流の証です。

パリの日本大使館員が見つけたフランスの中の日本



© Jean Le Vot

